The Topics

神奈川県

麻布大学

生命・環境科学部棟／麻布獣医学園アリーナ

AZABU UNIVERSITY
設計：(株)日本設計

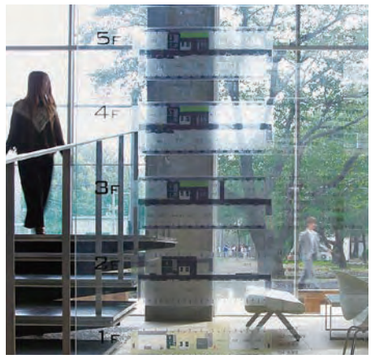
自然の力を建物に活かし、出会いを促す学究の場。

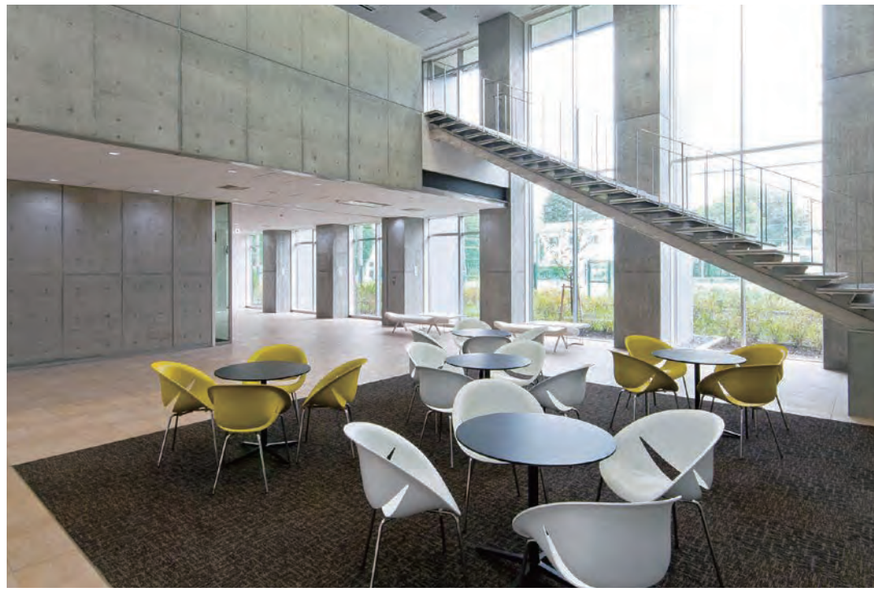
開設から120余年の歴史を持つ麻布大学は、獣医学部と生命・環境学部そして大学院から成り、「人と動物と環境の共生を目指す」ことを教育・研究の原点としている。3年前に設置された生命・環境科学部は、「人と人」および「人と環境」をテーマに、医療、食品、環境についてのスペシャリストを育成してきた。2011年9月に竣工した生命・環境科学部棟は、学部テーマにふさわしい、人と環境に配慮した建築となっている。この新棟および同時期に建設された麻布獣医学園アリーナについて、設計を担当した(株)日本設計の鳥越氏と陸川氏にお話を伺った。

写真撮影：三輪晃久写真研究所（家具納入写真を除く）

ソーラーチムニー

廊下つきあたりの採光窓





エントランスホール／ラウンジチェア：ソーハッピー、丸テーブル、ベンチソファ、ローテーブル

■ 光と風によって創られた学部棟

生命・環境科学部棟の建築コンセプトは2つあり、1つは「光と風を取り込む」こと、もう1つは「人と人の交流を重視する」ことです。

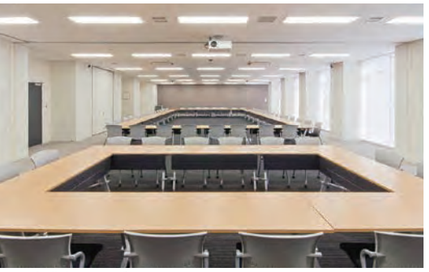
光と風を取り込むことは、生命と環境を科学する学部にふさわしい建物とするために不可欠な視点です。自然のエネルギーを最大限に使うために、「ソーラーチムニー」と「クールピット」を採用しました。建物の東・西端にあるガラス張り階段室が「ソーラーチムニー」になっており、屋根にベンチレーターが設置されています。これは、チムニーに蓄えた太陽熱による上昇気流とベンチレーターから誘引される外気の流れを使うという、まさに光と風の力を使った自然換気ですね。「クールピット」を活用することで、さらに空調負荷を低減しています。また直射日光を防ぐため、設備配管点検スペースを兼ねたバルコニーを設けました。

昼光を建物の奥まで取り込むために可能な限り間仕切をなくし、エレベーターシャフトもガラスとしました。廊下のつきあたりも採光窓にしましたが、人の歩く方向に光があると、奥深さが緩和されて不安感が減ると言われていますし、景色が見えて季節を感じることもできるのではないでしょうか。また、南北の「瀬戸レンガの透かし積み」壁面は、設備配管を隠すと同時に、透き間から室内に光を取り入れています。

獣医学部棟をはじめキャンパスの建物では、茶系のタイルなどがアクセントにされてきた経緯から、この棟もレンガを採用しました。レンガの重量感とガラスの繊細さが印象的な、明るくしかも伝統と風格がある建物となっています。

(株)日本設計
医療施設設計部 主任技師 鳥越 啓史氏
医療施設設計部 陸川 悠氏

講義室／デスク：SCM-300、イス：アイバッグ、教卓：S-30　201席



会議室／テーブル：CTZ、イス：ナビット

ゼミ室／テーブル：CTZ、イス：ルッシュ

自習室／デスク：SCM-300、イス：ルッシュ

マグネットスペース／特注テーブル、ラウンジチェア
1人掛けソファ、ロッカー

■ 人と人の交流を促す“マグネットスペース”

大学には、授業や研究などのフォーマルな場と、食事や休憩などのインフォーマルな場があります。しかし、人と人の交流を重視すると、その“中間の場”も必要ではないかと考えたのです。中間の場は、人と人を出会わせるという意味から、「マグネットスペース」と名付けられました。このスペースは3〜6の各階にあり、エレベーターホールの前に位置しています。しかも、トイレやロッカースペースが近くにあるので、学生も先生も必ず通るのですね。学生が1人で立ち寄って本を読んだり、先生と学生が偶然出会って会話を交わしたりといった光景を想定しました。広さもプライベートとパブリックの中間で、床には、靴を脱ぎたくなるような、やや毛足が長い芝生色のカーペットを敷いています。このスペースは予想を超えた利用があり、「授業で学生の居眠りが減った」という効果もあったようです。ここで先生と出会って身近に感じられるようになり、授業を真剣に聞くようになったのではないかと思われますが、交流がもたらした成功例と言えるのではないでしょうか。

■ 独自の家具や設備を活かすシンプルな空間

外観は自然の素材感を前面に出していますが、内装は素材感をそぎ落とし、白を基調としたシンプルなデザインで、木調家具をアクセントにしています。

エントランスホールについては、壁を設けたり大階段のステップ幅を変えたりして、吹き抜けの大空間に変化を与えました。壁の裏側にラウンジを設けていますが、そこは学生たちがほっとできる憩いの場になっています。家具は、背中を包み込むようなイスと円形のテーブルを採用し、上から見ると、花が咲いたような楽しさを感じますよ。

講義室のテーブルは、木調天板の奥行きをA4判資料が置ける400㎜まで縮め、快適さに配慮しながら席数を増やしています。またテーブルは、どの講義室でも使えるように、同じ規格のものを用意しました。

改装の可能性が高い研究室については、階下に迷惑をかけることなく改装ができるように、二重床にすることで施設の継続性に配慮しています。

The Topics　麻布大学 生命・環境科学部棟／麻布獣医学園アリーナ

写真提供：麻布大学

アリーナ／折りたたみイス、ステージ下台車
ステップ（特注品）、演台、花台、司会者台

麻布獣医学園アリーナ

■ 軽やかで明るい、エコ体育館

アリーナのコンセプトは「光と風を取り込む」ことです。建築的には、西壁と大きな屋根および庇がつくる逆L字形のシルエットを、3面のガラス壁が支える浮遊感をねらいました。西壁は隣接する馬場の砂塵や夕日からアリーナを守り、庇は夏の直射日光を遮ります。東・南・北のガラス壁は昼光を取り入れて照明無しでも明るい室内を実現しました。さらに、クールピットや外気との風圧差を利用した自動通風窓を設けて、空調負荷を軽減しています。また、アリーナの屋根架構に張弦梁構造を採用して薄くし、大空間を軽やかに見せるようにしました。

バスケットボールコートが2面使え、式典では1700人が収容できる広さを有しています。JR線の矢部駅にも近いので、今後は外部の利用も増えてくるのではないでしょうか。

実学重視の伝統がある当大学では、実習室をよく使います。当大学には多くの研究室があるので、2〜3の研究室で1つの実習室を使い回しできるよう、隣に準備室を併置して各研究室が使う実験機具などを収納する棚を設けました。

特色を出したかったマグネットスペースでは、単体でも組み合わせでも使える台形テーブルを特注しています。イスは基本的に、ポイントにグリーンを配したシンプルなタイプですが、1脚だけゆったりできる応接タイプにしました。いろいろなサンプルを用意して決めましたが、学生や先生でいつも満員だそうです。ここの家具の使い方は、各階を利用する人たちが創り出していくことになるのではないでしょうか。

サインは、抜いて透かすことで軽いデザインに。

■ 場づくりの鍵は、メリハリのある建築計画

大学、設計、施工の担当者がよく話し合い、共につくり上げた施設だったこともあり、基本的には設計意図が実現できたと思います。学生と先生のみならず、その背後にある大学の戦略や保護者など様々な目線を意識しながら、入学希望者を呼べるキャンパスづくりをすることの必要性を感じました。

現代の大学施設づくりでは、効率が重視され、無駄なスペースが排除される傾向にあります。しかし教育とはコミュニケーションそのものであり、それを促す空間こそが教育施設づくりではないでしょうか。効率的に共有化・集約化をしてフリーなスペースを引き出し、そこに特色あるコミュニケーション空間を創るという、メリハリのある大学施設づくりをしていきたいと考えています。